かずさの博物誌

コチドリの親子

～身を捨ててヒナを守る～

文・写真／成田篤彦

2012.9.20

農家の方が小櫃川の中流域で、道路沿いの水田を埋め立て、そこに、砂利を敷いて車が数台置ける駐車場を造った。だが、最近ではほとんど使っていない。この場所に三～四年前からコチドリが歩いている姿をよく見かけた。

「ここに巣をつくっているのでは？」と気になっていた。

コチドリの巣は、地上に浅いくぼみを掘り、小粒の石、貝殻片、小さな枯れ草などを敷いてつくる。時にはくぼみになにも敷かないこともある。コアジサシやシロチドリの巣に似ているそうだ。

砂利の地面を丁寧に見て、くぼみや卵の殻を何回も探したのだが、くぼみさえ発見できなかった。

ところが、今年の五月の晴れた日、二羽のコチドリが、この駐車場跡の荒れ地へ歩いていった。

「ヒナがいるのでは？」と思った。双眼鏡を取り出してのぞいた。

するとヒヨコよりも小さい、白色の毛糸の毬（まり）のようなものが大股で親の後について行った。

「あ！ヒナ、二羽だ」

ヒナの体は細くスマートで、白い綿毛と褐色の模様が砂利の色とまぎれて、肉眼ではとても気づかない。

近づくと近づいた距離だけコチドリの親子は遠のき、荒れ地の奥へ移動していった。

そばにあった物置に隠れて、しばらく待つと親子で戻って来た。

荒れ地の中で、四羽のコチドリの家族がそれほど離れずにゆったりと歩いていた。時に、一羽のヒナがまぶしげに細い眼をつぶって立っていることもあった。また、ヒナが長い脚を折り、親の腹の下にもぐると親は羽を広げてヒナを包み込んでいた。

私が立ちあがると駐車場跡に親子草地の中にいた。

道路に立ち停まった私に気付いたのか彼らは鳴きながらチョコチョコと道路の反対側の草地からそこに踏み込むと親がヨモギの草地に逃げ込み、身をさらし、私に向かって、激しく鳴き続けた。ヒナは砂利を敷いた所へ素早く走り、姿を消した。

「敷いた砂利のどこかに座ったのか？」と探してみたが、全く分からない。双眼鏡でみると砂利にすいつくように張り付いていた。見事な保護色で、カラスなどの天敵は上から見ても気が付かないであろう。

親鳥は絶え間なく鳴き、私を引きつけていたのだ。ヒナを守るための身を捨ててての親の行動だ。その親心が痛々しく、気の毒になってすぐにその場を離れた。

さて、コチドリは国内では全国に渡来し、繁殖する夏鳥である。

千葉県では北総や房総半島北部の海岸沿いに多い。上総の湿地ではよく見かけるチドリの一つである。

小櫃川中・下流域には砂利を敷いただけの仮設の駐車場跡や工場敷地などが所々にあり、時に繁殖している。だが、こういった場所は人々の都合ですぐに消失する場合が多い。

この小鳥の本来の繁殖地は広い砂浜、干潟、河川敷などであるが、年々これらの繁殖地は減少している。

彼らが長い年月にわたって繁殖できるこれらの自然を少しでも多く残したいものである。

▲コチドリの親とヒナ ＝チドリ目　チドリ科　全長16cm
県指定重要保護生物〈2012年5月10日　木更津市〉

▲身を伏せるヒナ
〈2012年5月10日　木更津市〉

▲親の腹の下にもぐるヒナ〈2012年5月10日　木更津市〉

▲コチドリの親＝ヒナを守るために敵を引きつける
〈2012年5月10日　木更津市〉

◎写真・文章の無断転載を禁じます。